

《巻頭言》

古典教育デザインと古典教育研究

三宅 晶子

横浜国立大学に赴任した最初の年に、この巻頭言を書かせていただいた。それからもう二十四年も経ってしまった。

大学院改革に関わり、「古典教育デザイン」という言葉を発見したことがきっかけで、科学研究費も教育研究のジャンルで貰い、国大での後半期は積極的に古典教育と関わってきた。最初は門外漢がおらずと、でも無責任にいろいろな問題意識を持って。主に教科書批判と教材開発を中心に、学生たちと共に学んだと言つて良い。十年を過ぎると、さすがに蓄積したことも多くなり、教科書が実はかなり良く工夫されて作られていることも分かってきたし、学校現場の抱える問題や、教員の可能性と限界なども見えてきた気がする。

古典文学を学んで、教材研究に取り組む学生たちは、実に有意義で面白い提案をしてくれる。私のやっていることは、ただの思いつきや問題意識を、文学研究の面からも教育の面からも検討して、間違いが無いかを確認し、学校現場で通用する提案に仕上げていくという作業のお手伝いである。あるいは、私が無責任に思いつくアイデアに共感してくれる学生が、調査や実験授業を重ね、実用化の努力をしてくれることも多い。いずれにしろ、二人三脚、あるいはゼミにおける共同研究的に、新しい魅力的な古典

教育を模索するというスタイルである。

学生たちによって、バラエティーに富んだ興味深い提案が、『教育デザイン研究』『古典教育デザイン』『横浜国大 国語研究』などを中心に発表されているので、ご覧いただきたい。

スローガンは「古文は時の方言」である。

結構有益な取り組みだと自負しているのだが、「国語教育研究」の専門家たちからはほとんど見向きもされていないようだ。先日 菊野雅之さんが『横浜国立大学 国語研究』に「古典は誰のものかー保科孝一の言説をきっかけにー」という原稿を書いてくださった。私の退職に合わせた古典特集への寄稿だったのだが、多くの先行研究が紹介されていたのに、触れてくれていなかった。やはり古典教育と古典教育研究は違うのだろうか。とはいえちよっと淋しかった。

古典教育の現場に新風を吹き込むことを目的としている。単なる実践報告ではなく、まともな文学研究のレベルにも耐えうる検証を経た、新しい提案。いつか「古典教育研究」の主要ジャンルとなることを夢見ている。